

平成26（2014）年度事業概要

1. 理事会・評議員会

- ・平成26年度第1回定例理事会(平成26年5月23日)
〔主な議決事項〕平成26年度事業・決算報告
- ・平成26年度第1回定時評議員会(平成25年5月23日)
〔主な議決事項〕平成25年度事業・決算報告
- ・平成26年度第2回定例理事会(平成27年2月21日)
〔主な議決事項〕平成26年度事業計画・予算
- ・平成26年度第1回臨時評議員会(平成27年3月13日)
〔主な議決事項〕平成26年度事業計画・予算、
定款の一部変更



平成26年第1回理事会

2. 決算

貸借対照表の要旨

(平成27年3月31日現在)

(単位：千円)

資産の部		負債及び正味財産の部	
流動資産	24,865	流動負債	3,512
固定資産	362,104	固定負債	0
基本財産	1,200	負債合計	3,512
特定資産	271,528	指定正味財産	169,440
その他固定資産	89,376	(基本財産充当額)	1,200
		(特定資産充当額)	168,240
		一般正味財産	214,017
		(基本財産充当額)	0
		(特定資産充当額)	103,288
		正味財産合計	383,457
合計	386,969	合計	386,969

正味財産増減計算書の要旨

自 平成26年4月1日

至 平成27年3月31日

(単位：千円)

科目	金額
経常収益	33,288
経常費用	30,782
(うち事業費)	25,935
(うち管理費)	4,847
経常外収益	0
経常外費用	0
法人税、住民税及び事業税	70
当期一般正味財産増減額	△ 2,436
当期指定正味財産増減額	△ 13,760

3. 角田文衛博士顕彰事業

(1) 第4回「角田文衛古代学奨励賞」

〔賞の趣旨〕

平成22年に当協会が創立60周年の年を迎えたことを記念し、当協会の創立者・故角田文衛博士の名を冠した角田文衛古代学奨励賞を創設。

本賞は、季刊『古代文化』への投稿原稿の中から秀作を選んで表彰し、古代史研究の奨励と若手研究者の支援を意図するものである。

〔選考の経過〕

第4回は『古代文化』第64巻（平成24年）～第65巻（平成25年）までの2ヶ年分の投稿論文のうち、

『古代文化』編集委員・編集参与・編集協力委員等66名の委員から推薦を受けた9編の論攷・研究ノートを対象とし、編集委員・編集参与を構成員とする選考委員会での審議を経て選考された。

授賞式は10月4日佛教大学四条センターにおいて執り行われ、賞状、副賞（研究奨励金）、記念品（角田文衛著『古代学の展開』、山川出版社、2005年・『平城時代史論攷』、吉川弘文館、2007年）が贈られた。

〔受賞者・受賞論攷・略歴〕

久米 舞子（くめまいこ）

「平安京『西京』の形成」（『古代文化』第64巻第3号、平成24年12月）

1982年東京都生、大阪府在住

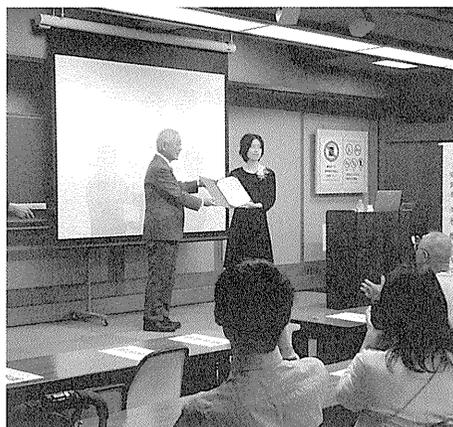
国際日本文化研究センター プロジェクト研究員（受賞時）

〔受賞理由〕

平安京右京は従来、『池亭記』の記述により10世紀後半には全体が荒廃したと考えられてきた。こうしたイメージは、考古学調査により徐々に訂正されてきているが、新たな知見を踏まえた文献史学による研究は、まだほとんどないと言ってよい。

この論文は特に従来実態があいまいなまま右京と同一視され、イメージが先行していた「西京」の実態とその変貌を、文献史学の立場から明らかにした点に意義がある。またここに提示された「西京」の変貌も、平安京が中世都市京都に発展・変化していく過程の実例として、以後の研究の重要な要になると考える。

この論文の要旨を、簡単に紹介したい。西京は、当初平安京右京を指す語として使用された。しかし右京が衰退するとともに「西京」のイメージも変化し、行政区分としての右京とはニュアンスが異なる、独自の意味を持つようになる。久米氏は、従来漠然と右京を重ねて考えられてきた「西京」の地理的範囲を確定し、右京と異なる、より狭い地域を示すことを明らかにした。それによると、「西京」は主に平安宮大内裏西の一帯、右京一条



佐々木理事長補佐から賞状を受け取る久米舞子氏

4. 研究事業

【個人・共同研究】

(1)〔研究題目〕礫群からみた岩宿時代集落の研究

(平成24～26年度：科学研究費 基盤研究(C)課題番号24520877)

〔研究代表〕鈴木忠司（古代学協会 研究員）

①課題の目的及び意義

礫群分析を通して岩宿時代集落で繰り返された日常の諸活動、集落構造の実像を明らかにする。調理行動の所産としての礫群の理解を含めた複合的観点から、集落の成り立ちの理解、解釈へとすすみ、岩宿時代集落のモデル提示とする。

②平成26年度の研究概要

平成26年度は、礫群研究会3回、資料調査13回12遺跡（研究協力者単独調査を含む）、石蒸し調理実験（石器石材加熱実験追加）を実施した。資料調査では資料操作の最終局面がまだ見えない東林跡遺跡を除き、法政大学多摩校地 A-0地点は資料の最終確認を終えるなど順調に進んだ。なお、実験は石器石材加熱実験が課題の中心に移行している。

詳細分析の対象としている4遺跡（1. 多摩校地 A-0地点、2. 高見丘（磐田市調査地点）、3. 高見丘（静岡県調査地点）、4. 千葉県東林跡遺跡、5. 茨城県赤岩遺跡のうち、1. 多摩校地 A-0地点は資料操作を終え、分析とその結果の記載に入っている。2. 高見丘（磐田市調査地点）については分析結果を基にした「礫群使用回数推定法」に関する論文の執筆を終え、『古代文化』誌に投稿中である。また、同遺跡の分析根拠になるデータを、投稿誌では紙数制限の為掲載できないので、本誌に提示した。

高見丘（静岡県調査地点）は資料調査最終段階一歩手前まで到達した。また、4. 東林跡と5. 赤岩の2遺跡は、現在遺物を借用し、資料検討をしているが、このうち赤岩の資料操作は完了し、分析・記載の段階に移行した。一方、東林跡の方は、資料の破損が激しく、資料操作に苦戦していて、資料操作の最終局面が何時訪れるか、まだ見通しが立たないでいるが、暫定的な結果を、平成27年度内刊行の「鎌ヶ谷市史研究」第28号に掲載予定である。

いずれにしろ、5遺跡中4遺跡は平成27年度中に概ね分析、記載に移行できる進捗状況にある。

なお、集落像の解析にあたり、火処・炉（火焚き場）問題の重要性が高まり、受熱石器の追及が欠かせないことが強く意識されるようになり、平成25年度に引き続き石蒸し調理実験の際に、急遽石器石材に対する加熱実験を行うことにした。この点は、新たな分析視点として来年度以降も継続実験の予定である。

③次年度の目標、課題

科研費による調査期間は終了したが、調査期間中の調査成果を一挙に成果集にまとめるのは難しいので、平成27年度からは、昨年までの科研費による調査データを基に、主

～二条の地域を指す、限定的な用語である。またその上でこの地がそれ自体独自の性格を持つ地域であったことを、史料に見える居住者の分析から明らかにしている。この地の住人は、下級官人層を中心に女性・僧侶など官司や権門と関係する雑多な人々から成り、上級貴族層が集住する宮周辺・左京北部とははっきりした階層差が存在した。その一方で両者の間には支配従属関係を始めとする交流が存在し、孤立した地域ではなかったとしている。ついで論文後半では、こうした雑多な居住者が地域住民としてまとめ、都市共同体を形成していく過程を、「花園今宮」と「北野」という、時期を異にする二つの御霊神祭祀との関わりを通して考察し、中世都市京都の成立を展望している。

今後、ここで明らかにされた「西京」の実態を、もう一度右京、ないし平安京全体の中で再検討する必要があるだろう。

主な著作

- ・「平安京羅城門の記憶」（『史学』76巻2・3号、2007年12月）
- ・「松尾の祭りと西七条の共同性」（『日本歴史』742号、2010年3月）
- ・「稲荷祭と平安京七条の都市民」（『史学』82巻1・2号、2013年4月）

◆第1回受賞者

- ・東村純子氏（日本学術振興会特別研究員（国立民族学博物館）
「輪状式原始機の研究」（第60巻第1号、2008年6月）
- ・土口史記氏（日本学術振興会特別研究員（京都大学人文科学研究所）
「先秦期における「郡」の形成とその契機」（第61巻第4号、2010年3月）

◆第2回受賞者

- 樋口健太郎氏（大手前大学非常勤講師）
「藤氏長者宣下の再検討」（第63巻3号、2011年12月）

◆第3回受賞者

- 中村耕作氏（國學院大學文学部助手）
「土器カテゴリ認識の形成・定義 ―縄文時代前期後半における浅鉢の展開と儀礼行為―」（第64巻2号、2014年9月）

（所属は受賞時）

（2）奨励研究員の公募

創立者である角田文衛博士が「歴史学・考古学を駆使した古代史の研究と人材の育成」を目的とされていたことを継承し、また、外部研究員との連携により古代学研究推進のために、若手古代史研究者への支援の意味を込めて平成24年度より公募を開始した。

平成26年度は、当協会の研究事業「糞置庄遺跡の研究」の研究テーマを推進するのにふさわしい学力と実績を有する若手研究者を若干名公募し、書類審査を経て1名の奨励研究員を決定した。

として上記5遺跡の個別レポートの執筆に集中する。集落論的総括分析においては、石器石材の加熱実験結果の援用の必要性を痛感しているが、科研費による成果刊行費を申請しつつ、平成28年度中の成果刊行を目指したい。

④平成26年度の研究成果

・成果発表

鈴木忠司・竹内直文・坂下貴則・礫群調理実験グループ「石蒸し調理実験記録2013—石英斑岩礫、小規模礫群調理および石器石材加熱実験をめぐる—（古代学協会年報『初音4』、2014年8月）

(2)〔研究題目〕近畿地方における初期農耕集落形成をめぐる考古学的研究

(平成24年度：所内研究費、平成25～28年度科学研究費 基盤研究(B)
課題番号25284159)

〔研究代表〕森岡秀人（古代学協会 客員研究員）

〔共同研究者〕桑原久男（天理大学教授）、寺前直人（駒澤大学准教授）、伊藤淳史（京都大学文化財総合研究センター）、若林邦彦（同志社大学准教授）、國下多美樹（龍谷大学特任教授）、上峯篤史（京都大学特別研究員）、山本 亮（京都大学大学院文学研究科）、岩崎 誠（長岡京市教育委員会）、村上由美子（総合地球環境学研究所）、櫻井拓馬（三重県埋蔵文化財センター）、川部浩司（三重県教育委員会）、オブザーバー参加 桐山秀穂（野村美術館）

①課題の目的及び意義

日本列島における農耕社会の成立は、歴史的な社会進化過程の大きな画期である。中でも列島中央部に位置している近畿地方は、その伝播プロセスと東方波及を考察する上に要の地域であり、縄文時代晩期から弥生時代中期にかけての集落遺跡の動態をはじめ、遺構・遺物の精緻な分析と研究は不可欠であり、本研究は、住まいの痕跡を濃密にとどめる居住域や集団の墓地構造が窺われる墓域、稲作が行われた水田やアワ・キビなどの農耕が行われた畑地を中心とする生産域などの基礎構造について、主要遺跡を通して改めて分析するとともに、居住地周辺の環濠や水路築造など大規模土木工事のありようや水利などにより組織化された集団の発展や衰退の状況を把握しつつ、初期農耕集落の形成を植生・生業・景観を含めた多角的な視野から総合的に深化させることをねらいとする。

②平成26年度の研究概要

日本列島における初期農耕社会の形成過程を考える上に、その中央部に位置する近畿地方の遺跡の展開過程の掌握は、不可欠な課題である。朝鮮半島南部から北部九州に伝播した初期の農耕技術や物品が変容しつつ東伝していく過程をとらえ、大阪湾岸を中心に内陸盆地、諸平野に定着した農耕集落がさらに東日本にどのような展開をみせるのか、その様相の実態や果たした役割の理解を踏まえて、研究を進めた。

総合的把握を目指している本研究では、考古学的な手法に基づき、遺跡自体の構造研究のみならず、農耕化によって変化や画期のみられる土器・磨製石器・打製石器・木製品や金属器の問題を連鎖させながら、要となる地域を対象に実施し、研究会を開催した。

資料調査 平成26年9月28日～30日 高知県における農耕開始期及び展開期の遺跡の立地、遺物の調査研究（田村遺跡、居徳遺跡）

平成26年11月11日 香川県における前期弥生時代出土資料の調査（下川津遺跡、一の谷遺跡、龍川五条遺跡）

平成27年2月9日～11日 東北部九州地域における弥生時代前期出土遺物の調査及び立屋敷遺跡の現地踏査

研究会 平成26年5月31日 第22回京都の弥生時代遺跡を考える会を共催

・内田好昭「下鳥羽、法性寺跡下層、烏丸御池遺跡出土弥生時代資料の検討」

平成26年6月14日「木製品からみた農耕社会への変化」

・村上由美子「弥生時代における木材利用の変化とその背景」

・樋上 昇「木製品からみた農耕化の過程」

平成26年11月9日「農耕開始期（縄文晩期～庄内式期）における年代議論をめぐって」

・中塚 武先生（総合地球環境学研究所）

「酸素同位体比年輪年代測定の方法と応用の現状」

・藤尾慎一郎先生（国立歴史民俗博物館）

「弥生早・前期のAMS年代測定をめぐる最新事情」

平成27年1月10日

・田畑直彦「西日本における遠賀川式土器広域編年の課題」

・櫻井拓馬「弥生時代開始期における石包丁製作技法の地域性～製作工程・穿孔技法を中心に～」

平成27年3月8日

・國下多美樹「近畿地方における青銅器生産の諸問題」

・柴田将幹「環瀬戸内地域における縄文／弥生移行期土器の系統関係」

出席者による現状報告等

③次年度の目標

農耕活動の拠点性を証する集落遺跡を多様な分析視点から再検討し、農耕金属器文化を擁する本格的な弥生社会に至るまでのプロセスと実証資料の整合を図りつつ、継続研究を深める。土器編年のリレー的な連絡関係、実年代を意識した併行関係を突き詰める作業は中間過程まで漕ぎ着けたので、基準尺度になり得る広域編年を確立し、整備された編年表作成と基準資料の集積に努める。打製石器・磨製石器の製作技術、石材研究や農耕社会成立前後の組成比較などの研究を進め、境界部の確認と漸移について見極める。農耕化における木器生産の展開、農耕具の変化を掌握する。また、その後に肥大する環

濠集落を中心に集落構造の解析を重点的に行い、今後の研究の基盤ともなる基礎資料
図・写真の集成作業を実施する。農耕社会化過程で顕現する社会進化のありようを予察
することにも意を注ぎ、研究内容の充実化に向け努力し、諸分野での調査事項に則した
解明点や中間成果を順次整備し、随時、得られた結果を関連学会における発表や専門
誌発表を広く行う予定である。



平成26年11月9日研究会



平成26年2月10日（公財）北九州市芸術文化振
興財団埋蔵文化財調査室 収蔵庫での資料調査

④平成25年度の研究成果

主な論文発表

村上由美子「弥生時代における木材利用の変化」『季刊考古学』127号 2014年4月

森岡秀人「倭国成立過程における「原倭国」の形成—近江の果たした役割とヤマトへの
収斂—」『纏向学研究』第3号2015年3月

主な学会発表

森岡秀人「近畿弥生社会の変質と金属器生産」第4回山口大学考古学研究室考古学研究
会、2014年6月

柴田将幹「板付Ⅰ式は実在するか？—「縄文／弥生移行期」を考えるために—」関西縄
文文化研究会6月例会、2014年6月

國下多美樹「水の道と弥生集落—考古学からみた地域間交流—」山城郷土資料館講演会、
2014年8月

桑原久男「日本列島における稲作農耕儀礼—弥生時代の絵画土器と銅鐸絵画—」光州新
昌洞遺蹟国際学術シンポジウム・稲作農耕社会の祭祀と儀礼—韓・中・日比
較—、2014年12月

田畑直彦「山口県佐波川流域の弥生集落」、第173回九州古文化研究会例会、2015年2月

國下多美樹「摂津・山背における銅鐸生産の背景」今城塚古代歴史館、2015年3月

(3)〔研究課題〕古代文明交流史の研究（平成24年度～：所内研究費）

〔研究代表〕 佐々木達夫（古代学協会 理事）

〔共同研究者〕 鈴木重治、能芝勉、植山茂、大立目一、西村昌晃、降屋哲男、他

①課題の目的及び意義

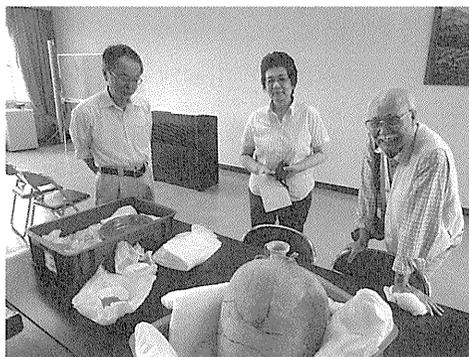
京都市内には古代の遺跡が数多く残り、そこから発掘された物を見ると、遠隔地の物資が多く運ばれていたことがわかる。交易は地域間の交流を促す主要な原因となり、考古学・古代史では、それが文明の交流を考える基礎的な資料となることがある。京からは大量の陶磁器が出土することが既に知られており、同時に他の地方ではきわめて珍しい陶磁器でさえたびたび発見されるという特徴もある。そうした陶磁器の様相を主要な遺跡で検討し、産地や組み合わせから古代京都における交流の実態を探る

②平成26年度研究概要

今年度は3回、資料見学を実施した。平成26年5月9日、京都府埋蔵文化財調査研究センターで、南山城の木津、樋の口（木津川市）、椋ノ木（精華町）、内里八丁（京田辺市）、その他の遺跡から出土した陶磁器を見学した。平成26年6月25日、京丹後市立古代の里資料館所蔵陶磁器を見学し、京都府立丹後郷土資料館で中野遺跡の出土陶磁器を見学した。京丹後市では竹野川、網野潟の周辺遺跡からのみ中国陶磁器が出土している。平成26年11月17日、京都市埋蔵文化財研究所深草収蔵庫で、上京遺跡・室町殿跡、平安京左京四条三坊十二町跡の出土陶磁器を見学した。遺跡出土陶磁器を検討し、京都の遺跡から出土した古代中世の海外産陶磁器や日本陶磁器の特徴を探った。

③次年度の目標、課題

京の遺跡から発見される陶磁器から、海外に開かれた京の生活文化史を考える手係りを得る。海外や国内遠隔地で作られた製品の流通状態から、他の文明や他地方との具体的物資の交流を探り、また、海外の遺跡から出土した類似の陶磁器との比較研究から、京の国際的文化交流の特徴を考える。



宮津市の遺跡出土陶磁器の見学風景と出土品

(4)〔研究題目〕紀伝道課試関係記事の編年的集成（平成23年度～：所内研究費）

〔研究代表者〕古藤真平（古代学協会 研究員）

①研究課題の目的及び意義

研究代表者は平成3年に「八・九世紀文章生、文章得業生、秀才・進士試受験者一覧（稿）」（『國書逸文研究』第24号）、平成7・8年に「10世紀紀伝道課試関係記事一覧（稿）」（『古代学研究所研究紀要』第5・6輯）を発表した。その目的は、日本古代の律令国家が中国の唐から継受した官吏登用試験である秀才・進士の受験者と試験問題、天平2（730）年に大学寮に設置された文章科（秀才・進士の2試に対応。平安時代に紀伝道と呼ばれるようになる）で行われた文章生試（漢詩作成を課す試験）の受験者と試験問題を具体的に示すことであった。本研究はその全面的な補訂を行い、11世紀以降についての基礎的な史料収集を行うことを目的とするものである。

②平成26年度の研究概要

平成23年度に作成した「紀伝道課試関係記事の編年的集成—八・九世紀における文章生試・文章生関係記事—」、24年度に作成した「紀伝道課試関係記事の編年的集成—八・九世紀における秀才・進士試、文章得業生関係記事—」を統合して報告書とするための仕上げを行い、さらに10世紀分の史料収集の全面的補訂作業と11世紀以降分についての基礎的な史料収集作業を行った。

本研究を広く学界に問うことにもなると考え、26年5月18日、京都女子大学で開催された和漢比較文学会の国内特別例会で「嵯峨朝時代の文章生出身官人」と題する発表を行った。27年3月、同題で論文化し、学術誌『アジア遊学』（勉誠出版株式会社発行）に投稿した（27年9月刊行予定）。

③次年度計画

組織内助成研究としては本年度で完了し、完成原稿まで仕上げることでできた8・9世紀分の史料集成を次年度に報告書として刊行して区切りを付けたいと考えている。10・11世紀分の史料集成については、一研究者の個人的研究として継続し、成果発表の仕方については模索を続ける所存である。

④平成26年度の研究成果

学会発表

- ・古藤真平「嵯峨朝時代の文章生出身官人」（和漢比較文学会国内特別例会「シンポジウム〈嵯峨朝の文学を考える〉」第一部関連研究発表、2014年5月18日、於京都女子大学）

論文発表

- ・古藤真平「日記逸文から読み取れること—『宇多天皇御記』の壺切由来記事の考察から—」（倉本一宏編『日記・古記録の世界』、思文閣出版、2015年3月）

書評執筆

- ・古藤真平「井上辰雄著『平安初期の文人官僚 栄光と苦悩』」（『日本歴史』第794号、吉川弘文館、2014年7月）

(5)〔研究題目〕二上山（糞置荘）遺跡の研究（平成25・26年度：所内研究費）

〔研究代表者〕山本 亮（古代学協会 奨励研究員）・竹内 亮

①研究課題の目的及び意義

角田文衛博士が、昭和28（1953）年に大阪市立大学教授として文献史学と考古学の接点となる古代荘園調査の先駆となる、『東大寺文書』越後開田図にみえる東大寺領糞置庄跡（福井件足羽郡下文殊村）の発掘調査を行った。この調査では荘園に関する明確な遺構を検出することができなかったが、弥生時代末期の多数の木製品や土器（月影式）が出土した。当時発掘担当者であった藤原光輝氏が早逝されたため、報告書は完成されないままであった。この調査に基づき、糞置庄についての文献史学と考古学の両面からの報告書を作成する。



資料の検討（森岡秀人氏）

②平成26年度の研究概要

報告書を刊行した。

【研究事業による出版】

(1) (公財) 古代学協会研究報告 第11輯『糞置荘・二上山遺跡の調査研究』

(A4判、本文90頁・図版9頁、平成26年3月刊)

編者名：竹内 亮・山本 亮

第1章 遺跡地の地形と環境

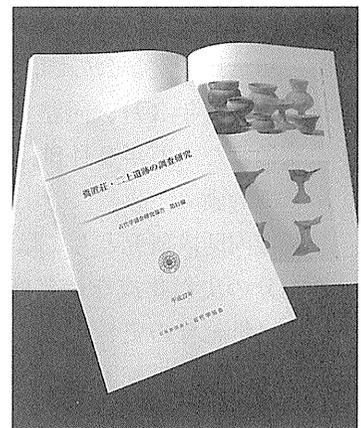
第2章 調査研究のあゆみ

第3章 調査の概要

第4章 出土遺物

第5章 考古学的分析と評価

第6章 越前国足羽郡糞置村開田地図の現地比定



5. 『古代文化』刊行事業

(1) 編集委員会（平成26年度）

編集委員11名、編集参与13名による編集委員会を月1回開催。編集協力委員39名の協力を得ながら、編集方針の決定、特輯の企画、投稿原稿の査読講評、掲載論文の決定等を行う。

- ◇編集委員 委員長 佐々木達夫（(公財) 古代学協会）
主任 鈴木 忠司（(公財) 古代学協会：日本考古学）

◇編集参与

古藤 真平 ((公財) 古代学協会：日本考古学)
角谷 常子 (奈良大学教授：中国古代史)
高橋 克壽 (花園大学准教授：日本考古学)
西野悠紀子 (女性史総合研究会代表：日本古代史)
野口 実 (京都女子大学教授：日本古代・中世史)
毛利 憲一 (平安女学院大学准教授：日本古代史)
森岡 秀人 (芦屋市教育委員会：日本考古学)
門田 誠一 (佛教大学教授：東アジア考古学)
山田 邦和 (同志社女子大学教授：日本考古学)
吉野 秋二 (京都産業大学教授：日本古代史)
市 大樹 (大阪大学准教授：日本古代史)
鈴木 裕明 (奈良県教育委員会：日本考古学)
栗原 麻子 (大阪大学准教授：古代ギリシア史)
桑山 由文 (京都女子大学准教授：ローマ史)
桑原 久男 (天理大学教授：日本考古学)
今 正秀 (奈良教育大学教授：日本古代・中世史)
田中 俊明 (滋賀県立大学教授：朝鮮古代史)
中村 大 (立命館大学グローバル・イノベーション研究機構：日本考古学)
中村 健二 ((公財) 滋賀県文化財協会：日本考古学)
古市 晃 (神戸大学大学院准教授：飛鳥・日本古代史)
中砂 明德 (京都大学准教授：中国古代史)
宮本 純二 (京都橘大学講師：エジプト学)
吉川 真司 (京都大学教授：日本古代史)
書記 山崎 千春 ((公財) 古代学協会)
事務 麻森 敦子 ((公財) 古代学協会)

◇編集協力委員

北海道・東北：小林 克 (秋田県埋蔵文化財センター)、斎野裕彦 (仙台市教育委員会)、
辻 秀人 (東北学院大学)

関東：金子信行 ((公財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団、川尻秋生 (早稲田大学)、車
崎正彦 (早稲田大学)、佐々木恵介 (聖心女子大学)、寺前直人 (駒沢大学)、比田井克
仁 (中野区教育委員会)、松本武彦 (国立歴史民俗博物館)、三上喜孝 (国立歴史民俗博
物館)

中部：伊藤雅文 ((公財) 石川県埋蔵文化財センター)、川添和暁 ((公財) 愛知県埋
蔵文化財センター)、久田正弘 (石川県教育委員会)、鈴木一有 (浜松市教育委員会)、
鈴木景二 (富山大学)、中沢道彦 (長野県)

近畿：関川尚功 (奈良県立橿原考古学研究所)、山中 章 (三重大学名誉教授)

中国：今津勝紀（岡山大学）、大日方克己（島根大学）、野島 永（広島大学）、濱田竜彦（鳥取県教育委員会）、松本岩雄（島根県立古代出雲歴史博物館）

四国：寺内 浩（愛媛大学）、中村 豊（徳島大学）、村上恭通（愛媛大学）

九州：木下尚子（熊本大学）、坂上康俊（九州大学）、永山修一（ラ・サール学園）、松井和幸（北九州市立自然史・歴史博物館）、宮地聡一郎（福岡県教育委員会）、柳澤一男（宮崎大学）

海外領域：青山和夫（茨城大学）、川本芳昭（九州大学）、工藤元男（早稲田大学）、妹尾達彦（中央大学）、南雲泰輔（山口大学）、長谷川修一（立教大学）

（2）『古代文化』の刊行

第66巻1号 藤山龍造：砥石から読み解く骨角器生産—栃原岩陰遺跡を中心に—
（平成26年6月）小林正史：ススコゲ観察による弥生・古墳時代の炊飯方法と米タイプの復元—米品種交代仮説の提唱—

樋口健太郎：藤原忠実と宇治

坪井 剛：「建永の法難」事件再考—訴訟過程の検討を中心として—

野口 優：後漢辺境における軍事防衛体制の転換

今村啓爾：「銀錢・銅銭等価公定流通の目論見失敗説」の証拠と論理

小池勝典・渡辺 誠：人面付小型壺を内蔵する埋甕

—長野県宮田村中越2遺跡の近年の発掘例について—

藤井律之：岡部毅史氏による拙著『魏晋南朝の遷官制度』書評への疑義

角田文衛：西洋古代史（1934年）（2）

外山和夫：〈考古学人国記—評伝 戦後日本の考古学を支えた地域研究者—〉

（1）藺田芳雄と弥生時代黎明期

山本忠尚：正倉院宝物を十倍楽しむ（3）

東影 悠：奈良県高市郡明日香村 史跡・名勝飛鳥京跡苑池

第66巻2号 加藤一郎：後期倭鏡研究序説—旋回式獣像鏡系を中心に—
（平成26年9月）中本 和：初雪見参と大雪見参

特輯 古代大隅国の歴史的展開

永山修一：特輯「古代大隅国の歴史的展開」によせて

原口耕一郎：隼人論の現在

永山修一：鹿児島県の墨書土器について

深野信之：考古学からみた古代大隅国

栗林文夫：古代末における大隅国の宗教的空間

—正八幡宮・台明寺を中心にして—

鈴木景二：史跡隼人塚とその石造物
 日隈正守：大隅国正八幡宮領の形成過程—大隅国の事例を中心に—

 岩田慎平：中世成立期における鎌倉幕府の位置づけをめぐって
 —佐藤進一・黒田俊雄両氏の説の比較を中心に—
 角田文衛：西洋古代史（1934年）（3）
 米田雄介：覚書 東大寺献物帳（二十二）—正倉院宝物の原簿—
 山本忠尚：正倉院宝物を十倍楽しむ（4）
 鴨志田篤二：〈考古学人国記—評伝 戦後日本の考古学を支えた地域研究者—〉
 （2）藤本彌城と先史資料
 海野 聡：平城宮における幢旗の遺構の発見—奈良県奈良市平城宮跡—

第66巻3号 公益財団法人 古代学協会 第4回「角田文衛古代学奨励賞」受賞者発表
 （平成26年12月） 関根章義：古代陸奥国における陶硯の受容と展開

—城柵官衙遺跡を中心として—
 梶山 勝：象徴化する貯貝器 —漢代滇国社会と権力者—

特輯 古墳時代から律令時代への祭祀の変遷（下）

大平 茂：特輯古墳時代から律令時代への祭祀の変遷（下）によせて
 大西 顕：能登半島における古代祭祀の変遷 —能登国—
 山柘雅美・濱 隆造・岩垣 命：青谷平野における律令的祭祀
 —因幡国—
 宮島義和：古代木製形代の祭祀 —信濃国—
 穂積裕昌：古墳時代祭祀遺跡から神宮祭祀へ —伊勢国—
 松尾充晶：社殿の成立過程とその背景 —出雲国—

小林理恵：平安期の葬送と喪葬令
 角田文衛：西洋古代史（1934年）（4）
 鈴木 啓：〈考古学人国記—評伝 戦後日本の考古学を支えた地域研究者—〉
 （3）梅宮茂と複式炉
 米田雄介：覚書 東大寺献物帳（二十三）最終回—正倉院宝物の原簿—
 山本忠尚：正倉院宝物を十倍楽しむ（5）
 佐伯英樹：栗東市下鉤東・蜂屋遺跡 —皇朝十二銭を用いた地鎮祭祀—
 中井義明：訃報 浅香正先生のご逝去

第66巻4号 渡邊英幸：里耶秦簡「更名扁書」試釈

—統一秦の国制変革と避諱規定—

(平成27年3月) 滝沢規朗：越後・佐渡における鉄器と青銅器—伝来の系譜と性格—

森本幹彦：外来系土器からみた対外交流の様相

—弥生時代終焉にむけての北部九州—

本村充保：近畿地方における古代の下駄の様相

木村光一：高霊池山洞44号墳に見る大加耶の階層構造

永井 晋：高倉宮以仁王の家族と縁者

西田泰民：1922年伊川津貝塚調査—小金井良精調査野帳より—

角田文衛：西洋古代史（1934年）（5）

鵜飼幸雄：〈考古学人国記—評伝 戦後日本の考古学を支えた地域研究者—〉

（4）宮坂英式と尖石・与助尾根遺跡

山本忠尚：正倉院宝物を十倍楽しむ（6）

巽 善信：ティリンス遺跡報告書原画について

—シュリーマンの情熱の筆跡—

編集委員会：山中裕先生の御逝去

隴谷 寿：山中裕先生の思い出

近藤好和：山中裕先生の思い出

6. 普及事業

（1）公開講演会

“第4回角田文衛古代学奨励賞受賞 記念講演会”

「平安京『西京』と都市民の世界」

日時：10月4日（土）13時～14時30分

場所：佛教大学四条センター

講師：久米舞子（国際日本文化研究センター

プロジェクト研究員）

参加者：約100名



久米舞子氏による第4回角田文衛古代学奨励賞 記念講演会

公益財団法人 古代学協会公開講演会
第4回角田文衛古代学奨励賞 受賞記念講演

平安京「西京」と都市民の世界

久米 舞子（国際日本文化研究センタープロジェクト研究員）

日 時： 2014年10月4日（土） 13:00～14:30
会 場： 佛教大学四条センター（京都府下京区回楽町九北町角）※新二条ビルディング4階
定 員： 先着150名 お申し込み不要
聴講料： 1,000円 ※ただし、古代学協会賛助会員・正会員は聴講料無料

「二十余年以来、東西二京を歴見するに、西京は人衆漸く稀にして、（…）遺蹟に依り、
文獻を學びの記の首に於て慶應保元が、天元五年（九八二）に著した『平家物語』に、「西
京」と記された『西京』。その遺蹟は、長らく十世紀の平安京の果敢と認められて
きました。しかしこの認識は、現代の私たちが考えるような、平安京の複層的な描写であら
ないのでしょうか。発掘調査の進展により、考古学の側からは近年その詳細が再考されつ
つありますが、歴史学からみた西京の形骸は未だなされたといえます。

そこで講演では、まず西京をキーワードに、この言葉が何を意味してきたのかという歴史的
変遷を辿り、発掘調査による西京の位置づけを明らかにします。一方で、十一世紀以降
に西京が、特定の地域を示す呼称として定着したことを明らかにします。そしてこの西京に
どのような人々が暮らし生きたのか、何を思い描いたのかを、古記録や説話など多様な史料を基
じて読み解きます。また西京という地域は、中世になって北野社との結びつきを強めます。そ
こで西京の住人たちが、北野祭をめぐって、この地とどのような関係をより結んだのかを明ら
かにします。

これまで西京・東京と知られてきた西京について、史料に即して改めて見直してみ
ると、そこには新たな姿が見えてきます。西京を都府民が憩いた場とらえ、彼らが作り上げた
地域社会に光をあてます。

〒605-0854 京都府京都市中京区三条高倉（京都文化博物館内）
TEL.075-252-2000（火～土 10:00～18:00）担当：鈴木・田島・志谷

(2) 公開講座

1) 古代学講座

平成23年度よりスタートした。少人数で楽しく受講できるような内容であるとともに、継続講座をいくつか設け、単に講師の話を聞くだけでなく、積極的な学びの場を提供している。

◆平成26年度前期講座（平成26年4月～7月、9月）

講座名	講師	開催日
『小右記』講読 —平安貴族の日常に触れてみよう—	野口孝子（同志社女子大学講師）	第2土曜日
「京都学講座」平安京研究の方法	山田邦和（同志社女子大学教授）	第3金曜日
古代天皇の即位事情3	米田雄介（元正倉院事務所長）	第3土曜日
考古学からみた陵墓古墳とその被葬者像	西川寿勝（大阪府教育委員会文化財保護課）	第3土曜日 ※最終回は第2土曜日
大和・箸墓古墳出現の謎を追う	森岡秀人（古代学協会客員研究員）	第4水曜日
宇多上皇鷹狩記を読む	古藤真平（古代学協会研究員）	5/28、6/25、 7/23、9/24
紫式部集を読む—陽明文庫本と実践女子 大学本を比較しながら—	笹川博司（大阪大谷大学教授）	4/26、6/28、7/26
ヒエログリフ文法講座	深川慎吾（古代学協会客員研究員）	第4土曜日

◆平成26年度後期講座（平成26年10月・11月～平成27年1月～3月）

講座名	講師	開催日
『小右記』講読 —平安貴族の日常に触れてみよう—	野口孝子（同志社女子大学講師）	第2土曜日
『吾妻鏡』に見る、鎌倉幕府と京都 —建久六年記を読む—	岩田慎平（立命館大学非常勤講師）	第2土曜日
「京都学講座」平安京研究の方法2	山田邦和（同志社女子大学教授）	第3金曜日
古代学研究所の日本古代史研究と私	古藤真平（古代学協会研究員）	第3土曜日
ヤマト王権と朝鮮半島	西川寿勝（大阪府教育委員会文化財保護課）	第3土曜日
古墳出現年代論争を問い直す	森岡秀人（古代学協会客員研究員）	第4水曜日
ヒエログリフ文法講座	深川慎吾（古代学協会客員研究員）	第4土曜日

※日付のないものは5回



山田邦和先生「京都学講座」

2) 古代学サロン

歴史学や考古学などに関心のある方なら、だれでも参加でき、講師の先生を囲んで、くつろいだ雰囲気です。

講師：富谷 至（京都大学人文学研究所）

日時：平成26年8月20日（水）

場所：（公財）古代学協会

角田文衛博士記念室



富谷至先生

3) 連携講座

古代学講座は講座室の関係で受講者が少人数のため、より広く古代学講座の裾野を拡げる目的で、他機関と連携した講座を開設した。特に佛教大学四条センターの講座は150名以上の受講者となった。

【佛教大学四条センター提携講座】

場所：佛教大学四条センター（京都市下京区四条烏丸北東角 京都三井ビルディング4階）

日時	講師	テーマ
4/16	関川尚功 （榎原考古学研究所共同研究員）	考古学よりみた古代日本の変革期 邪馬台国論争と古代国家の形成—「大和説」は成り立つか？
6/18	関川尚功 （榎原考古学研究所共同研究員）	考古学よりみた古代日本の変革期 飛鳥の時代を読み解く
8/27	宮本純二（京都橘大学講師）	古代エジプト文明・探訪—悠久の王朝史と考古学— 悠久の王朝史を辿る
10/8	宮本純二（京都橘大学講師）	古代エジプト文明・探訪—悠久の王朝史と考古学— エジプト考古学の魅力
12/10	山中 章（三重大学名誉教授）	伊勢湾の考古学 6世紀王権の伊勢湾支配—大鹿ミヤケの伊勢湾水上交通管理—
2/25	山中 章（三重大学名誉教授）	伊勢湾の考古学 鈴鹿関と古代東海道—三関による陸上交通路の確保—

【朝日カルチャーセンター京都・古代学協会共催講座】

会場：朝日カルチャーセンター（京都市中京区河原町三条上ル 京都朝日会館8階）

日時	講師	テーマ
4/19	岩田慎平（立命館大学非常勤講師）	鎌倉時代の遊女の物語 舞女・微妙の周辺
5/24	前川佳代（奈良女子大学古代学学術 研究センター協力研究員）	京都と平泉 文化と人の交流
6/11	若林邦彦 （同志社大学歴史資料館准教授）	弥生時代の戦（いくさ）
7/18	河内将芳（奈良大学教授）	戦国時代の京都の祇園祭

日時	講師	テーマ
8/2	西川寿勝（大阪府教育委員会文化財保護課副主査）	考古学からみた応神天皇の実在性 5世紀政権の拠点は河内か大和か
9/10	桐山秀穂（野村美術館学芸課長）	茶の湯が生まれるまで 茶と茶道具の歴史
10/18	米田雄介（元正倉院事務所長）	正倉院展への誘い
11/1	積山 洋（大阪市博物館協会大阪文化財研究所学芸員）	難波宮と東アジア国際社会
12/10	高橋康夫（花園大学・京都大学名誉教授）	平安京から京都へ 都市計画とまちづくり
1/30	瀧浪貞子（京都女子大学名誉教授）	京都御所一王朝の歴史遺産
2/20	梶川敏夫（京都市埋蔵文化財研究所次長・京都市考古資料館館長）	院政期の白河天皇の法勝寺と六勝寺

（3）広報物の出版

1）『初音』4（平成26年8月30日発行、B5判92頁）

- ・平成25年度事業報告
- ・研究報告

鈴木忠司・竹内直文・礫群調理実験グループ「石蒸し調理実験記録2013 ー石英斑岩礫・小規模礫群調理および石器石材加熱実験をめぐるー」

藤本孝一「大島本『源氏物語』の本文復元研究」

- ・古代学講座受講者による 研究発表

近藤公子「卵と単性生殖ー『小右記』講読を足掛かりとして」

2）古代学協会だより『土車』第127号

（平成26年11月30日発行、B5判、8頁）



『土車』127号 当協会ホームページにて公開中

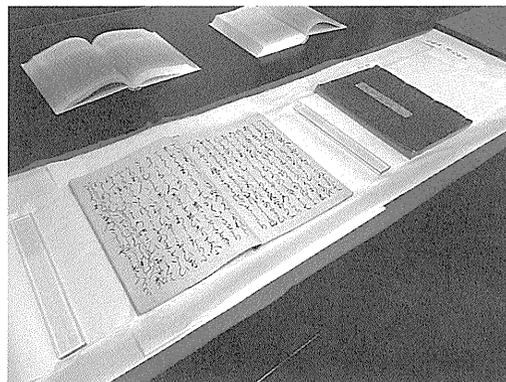
（4）資料の活用・管理・整理

1）所蔵資料の活用

当協会では、創立以来、研究活動の為、文献資料・考古を収集してきた。資料は一部を京都府京都文化博物館に寄託し、一般や公共機関、研究機関、研究者の利用希望に応じて、可能な限り資料を提供している。資料提供には資料調査等に係る閲覧や貸出及び掲載許可申請がある。（一部有料）

平成26年度資料貸出等

利用形態	史料名	数	申請者	使用目的等
展示	大内裏図考証、 院宮及私第図、 平安京条坊図	3	東京都江戸東京博物館	特別展「大江戸と洛中～アジアの 中の都市景観」
翻刻 写真撮影	太政官謹奏	1	(株) 搞書房	『日本古代の国家と王権・社会』 所収 田島公著「古代学協会蔵天 平宝字二年太政官奏可燃旧文書」 小考」
調査撮影	本朝皇胤紹運録 清辨眼抄（宝暦十一年写） 拾芥抄（活字本） 水鏡（伝寂蓮筆） 続日本後紀巻七・八	5	東京大学史料編纂所	
展示	大島本 源氏物語 紫式部日記絵巻断簡	1	京都文化博物館	総合展示「源氏絵の時代—近世京 都と源氏物語」
翻刻	自筆本『明月記』	1	朝日新聞社冷泉家時雨亭 叢書刊行委員会	『冷泉時雨亭叢書』
熟覧	大島本 源氏物語	3	当協会	協会関係者特別内覧会
展示	大内裏図考証、 院宮及私第図、 平安京条坊図	3	京都文化博物館	総合展示「近世京都の考古学者」
展示	大島本 源氏物語	2	京都文化博物館	増誉大僧正900年遠忌記念展 「聖護院門跡の名宝」
熟覧	大島本 源氏物語		松室寛二	調査研究



平成26年11月14日 特別内覧会の様子